

# Lectio Divina で味わう主日の福音・A年

## 巻頭言

カトリック大阪大司教 池長 潤

聖書という書物は、天地万物をお造りになった神ご自身の人々に対する贈り物です。人に贈り物をする場合、相手を本心から大切にしていれば、その人にとって非常に喜ばしくよい物を贈ります。神は人を無限に愛されていますので、とても素晴らしいものを与えようとされます。その証拠に、おん父は、人類にご自分のおん子を贈られました。従って聖書も、人々に対する神の贈り物だと言えるのです。聖書が人々のためにどれほど価値あるかけがえのない贈り物であるかは十二分に察しがつくわけです。

聖書が神からの贈り物であることを教会は誰よりも知っています。神から与えられた権威によって、神からの啓示の書物と、そうでない書物とを選び分け、聖書がどの書物から成り立っているかを確立したのも教会でした。聖書が私たちに対する神からの啓示であるならば、私たちは神から自分に与えられた神の語りかけられる言葉として、この書物を受けとらなければなりません。聖書がみ言葉と言われる由縁です。

私たちが、どれほど聖書に親しみ、その教えに深く触れ、自分の心に聖書を通して神の教えや諭しや語りかけをしっかりとめる必要があるか、気づくことの大切さの理由がここにひそんでいるのです。

さて、レクティオ・ディヴィナというのは、ラテン語で *Lectio Divina* と書きます。この言葉が生まれたのは、ローマの迫害が終わるより前のことでした。それから世界に広がる教会の中で、ずっと聖書を深く読む実践とその方法を指してこの言葉が使われ、聖書深読の習慣を信仰の世界の中で広めてゆく大きな役割を果たしてきたのです。

聖書は読むだけの書物ではなく、心で聞く書物でもあります。生きた神ご自身から、今読んでいる事柄の意味内容を聞かせて頂くのです。従って、読むと同時に、そこに現存して私たちに教えようとしていらっしゃる神からじかに読んでいる事柄の意味を教えて頂かなければ、そこに記されている出来事や文章や言葉は啓示とはなりません。ユダヤ人ヨシュア・ヘッセルは、「人が神に質問を投げかけるよりも、人が神のことばを聞きとる態度が *Lectio Divina* の中心である」と言っていますが、示唆に富んだ言葉です。だから聖書は「読み」・「黙想し」・「祈り」・「観想して」、はじめて本来の目的を果たすことになるのです。 *Lectio Divina* すなわち神的な読書と言われてきた通りです。

日本聖書協会がこうして日本語に翻訳し、皆様のもとに送って下さる「*Lectio Divina* で味わう主日の福音」が、皆様が直接、福音書において神の啓示に触れる縁となるよう祈ります。